



The Kyoto University Library Bulletin

静脩

1969年 3月

Vol. 5, No. 6

木 造 の 図 書 館

青 山 秀 夫

桑原（武夫）さんは、その『文学入門』の中で、昭和のはじめ、大衆文学の発生と前後して、日本の図書出版事情が大きく変ったことを書いている。円本の文学全集や岩波文庫や大衆雑誌のキングなどが出はじめ、図書・雑誌が（ある程度その内容とともに）大衆化したというのである。桑原さんのこの議論は、私自身の経験にてらしても、思いあたることが多い。

私は明治の終りに岡山県東部の農山村に生まれ、ちょうど岡山の旧制高等学校の学生であったころ、この「革命」にぶつかった。改造社の文学全集で小説をよんだり、岩波文庫や岩波講座『世界思潮』を買ったことを思い出すが、私自身の場合も、いわばレジャー用に（教科書や参考書としてでなく）、書物らしい書物をすこしまとめて買い出したのはこのころからのことらしい。

田舎に育った関係もあり、図書の個人的蓄積ということは、おくれて始まったようだ。結局このころから始まって、蔵書癖がつづくことになった。

このように明治の生まれであるから、ご厄介になった図書館も古いが、とくに幾つかの木造の図書館が今もなお印象にのこっている。

私が育った田舎の小学校には、図書館とか図書室というようなシャレたものはなかった。楽器も教室に小さなオルガンがあるだけだった。300戸ほどの村の中に、蔵書をもった家など恐らくなかったであろう。（それでも、もっと山奥の、もっと貧しい村はいくらでもあった。）私自身、図書に対する欲求はあったであろうが、それが表面化せず、したがって図書への飢餓を感じなかったのも、こういう農村に育ったためかも知れない。

岡山の中学に入ったが、そこでも図書室は寄宿舎にあるだけだったようだ。ただ、県立の図書館があり、そこに行った。車で通学しており、当時の汽車は数が少なく、待ち時間が相当長かったので、その間を図書館ですごしたわけだ。

この図書館でも、何か耽読した記憶はない。むしろ記憶に残っているのは、この図書館が青黒いペンキを塗った木造の2階建てであったこと、そしてそのすぐ下に旭川が屈曲して流れており、ちょうど屈曲点なのですこし澱んでいたことである。図書館はすこし薄ぐらかったが、下を流れる水と同様に、清潔だった。

中学から旧制高校（六高）にうつったとき、その図書館は教室から近かった。緑の芝ふの間を1、2分歩くと、すぐ図書館に行けた。

これも木造であった。20才前後の男女で、ろく膜や結核をわずらい、病死するものが大変多い時代であった。こんなことから、高等学校の学生の死亡率も高かったが、病没者に対して遺族や友人が記念文庫を図書館に寄贈していた。概して哲学書や文学書から成るものであり、裏表紙に故人の写真がのっていた。

そういう文庫の中で文学書めいたものを読んだ。津田（左右吉）先生の『文学にあらわれたる国民思想の研究』の各編を耽読したのもここであった。これは国史の先生が参考用に出して下さっていた書物の中にあった。

京都大学に入ったとき、何回か京大の図書館に入った。これも焼ける前の木造であったが、書物を買うくせが出来ていたためか、あまり厄介にならなかった。

当時丸善の京都支店が三条にあった。梶井基次郎の『檸檬（れもん）』に書いてある通りである。京大の図書館も丸善も木造で、しかもどちらも天井が低かったためか、いつも連れ立って二つが思い出されるが、図書館よりも丸善に行くほうが多かった。

最近、新刊書、とくに普及書は、山のように多い。たしかに文運の隆盛を慶賀したい。昭和のはじめの、桑原さんが指摘された大変化ののちも、今にくらべると新刊書は少なかった。専門書の出版はとくにすくなかった。つまり、私たちが育ったのは、今にくらべて書物のはるかに少ない時代だったわけだが、そのことがそれほど不幸には感じられない。いろいろ事情はあろうが、当時書物に対して大きな尊敬が払われていたこともその一つの理由のようである。
(経済研究所教授)

一言・ふたこと

図書館の仕事というものは、元来地味で表面に出ず、それでいて完全性、もうら性が要求されるものである。しかし、最近そのことが忘れられている面もあるようである。例えば現在の目録は利用者の立場から見れば、必ずしも使いやすいとは言えない。分類も学問の進展に応じていないところもある。書庫も蔵書の増加とともに狭くなりつつある。また、欠本が意外に多いことも気にかかる。再購入もされず、手作りの表に控えられているだけである。排列の誤りは、うっかりしていただければ済まない。増大する雑誌、紀要類の製本の基準もその時の予算の具合で決ることがある。昨年の内部改装も何年あとまで考えられているのであろうか。要するに、

部局図書館を含めて大学図書館のあり方の根本的理念、構想が

図書館に願う
仕事と人間

未だ十分に確立されていないのではないだろうか。さらに細かく言えば、本の正誤表

の問題がある。これは、訂正されず、そのまま見開きにセロ・テープではられているだけなのである。痛んだ本の修理も一時の間に合せに過ぎない。いつからか、従来の風格のある蔵書印が、簡便で安っぽいものに取って代わった。玄関前に雑然と置かれた自転車や期限の過ぎた掲示物は、また一体何を語るのか。図書館こそ時流に流されず、過去の保存とともに、絶えず未来への展望を究めておかねばならないし、職員のかたも御苦労だが労働者ならぬ人間としての自覚を持っていただきたいと思うのである。

(文学部大学院学生 若井勲夫)